

日本学術会議 in 富山 開催報告

第 24 期中部地区代表幹事 戸田山 和久

日時：2019 年 6 月 28 日（金）11:10~17:15

会場：富山大学五福キャンパス・黒田講堂

第三回の地方学術会議は富山県での開催となりました。第一回の京都、第二回の北海道札幌は、比較的大きな都市での開催でした。これら大都市に比べて小規模な富山での開催にあたって、われわれは、会議全体のコンパクト化によって、今後どこの地方でも気軽に開催していけるようなモデル



ケースとすること、地域の方々をできるかぎり巻き込み、地方で学術会議を開催することの意義を明確にすることを目指しました。年に 2 度開催している中部地区会議運営協議会・科学者懇談会と同時開催とし、会場も大学の講堂を使用させていただくことで、予算面・運営面での軽量化を図りました。こうしたわれわれからの提案をポジティブに受け止めていただいた幹事会の皆様に感謝いたします。

【第一部】

今回の「地方学術会議 in 富山」は二部構成としました。11:10 から黒田講堂 1 階の会議室で開催した「地方学術会議」は、地域の会員・連携会員と会長・副会長との交流・意見交換を中心としたクローズドな催しです（出席者約 40 名）。山極壽一・日本学術会議会長、斎藤茂・富山大学長、戸田山からの開会挨拶に続き、SDGs をテーマとする 2 つの講演をいただきました。渡辺美代子・日本学術会議副会長からは、「日本学術会議の SDGs への取り組み」と題して、「強みは教育、弱みはジェンダー平等」と端的に日本ゼんたいの達成状況が鳥瞰されたのち、学術会議における取り組み状況の報告がなされました。印象的だったのは、第 24 期における日本学術会議の SDGs への取り組みでは、学術会議から SDGs へ貢献することのみならず、それを通して学術会議の「体質改善」が目指されて

いるという発言でした。それに引き続き、SDGs と学術会議が発出してきた提言との関連について情報提供がなされ、最後にSDGsを超えた諸課題に取り組み、日本の特徴を生かした議論の結果を提言として発出していくことが学術会議の努めである、と述べられました。続いて、富山大学都市デザイン学部・副学部長の堀田裕弘先生から「富山大学でのSDGsへの取り組み」と題する講演をいただき、持続可能な付加価値都市としての発展を目指す富山市と、富山地域における地の拠点としての富山大学とが連携して進めているSDGs達成のための取り組みが紹介されました。1) 公共施設等でのエネルギーマネジメントのためのプログラム開発、2) ESG (Environment Social Governance) 投資の推進によるエネルギーコスト削減と地域活性化を同時達成する試み、3) 市内小中学校を巻き込んだESDコンソーシアムによる持続可能な地域の担い手を生み出す教育の推進、の3つの取り組みのそれぞれについて、狙いと現状・成果を紹介していただき、活発な質疑応答と意見交換が行われました。

【第二部】

昼食を挟んで、13:00 から黒田講堂 2階ホールに会場を移し、第二部として、一般参加者にも開かれた「学術講演会」と「パネルディスカッション」を開催しました。学術講演会前半では、富山大学の個性的な研究領域である「脳科学と和漢薬」をテーマとして、2件の最先端研究成果を報告いただきました。富山大学大学院医学薬学研究部教授・井ノ口馨先生による講演「記憶の神経科学的実体」では、記憶が他の記憶と関連づけられて蓄えられるのはなぜか、にもかかわらず関連づけられてもそれぞれの記憶はアイデンティティーを保つのはなぜかという二つの根本的な問いに対して、その神経科学的基盤を明らかにする先生の実験結果がわかりやすく紹介されました。続いて、富山大学和漢医薬学総合研究所教授・東田千尋先生による講演「和漢薬を基盤とした神経疾患治療薬開発」では、神経繊維の萎縮を食い止めるだけでなく、その再伸展・修復を促すことによってアルツハイマー病を治療する薬効をもつ物質として、山芋に含まれる Diosgenin の発見から新薬開発に至るまでのご自身の研究をご紹介いただきました。

学術講演会後半は、その後のパネルディスカッションに繋げることを意図して、テーマを「学術研究とSDGs」としました。まず、富山大学大学院理工学研究部教授・張勁先生によるご講演「気候変動と富山の水循環」では、世界の気候が海洋大循環に支配されていることが指摘されたのちに、富山の水循環もそれ

と無縁ではないことが示されました。標高 3000 メートル級の立山連峰から、水深 1200 メートルの富山湾までの高度差 4000 メートルにわたるダイナミックな水循環が、富山県の貴重な自然環境と山海の恵みをもたらしてくれていること、それが現在岐路に立たされていることを学ぶことができました。

次いで、富山大学大学院理工学研究部教授・椿範立先生から「クリーンエネルギー開発」と題するご講演をいただきました。椿先生の研究室で取り組まれている籾殻などのバイオマスから、触媒を用いてジェット燃料、軽油、LPG、プロピレン、エタノール、酢酸エステルなどの有用な化学製品・エネルギー源を生み出す「C1 化学」の成果と課題について豊富な事例が紹介されました。

最後のご講演は、本田信次・富山市政策監による「富山市の取り組み」でした。富山市では、人口減少と超高齢化に対応するため、公共交通の活性化、公共交通沿線地区への居住、中心市街地活性化の三本柱からなる「コンパクトなまちづくり」を推進していますが、そのための様々な施策と政策課題が紹介されました。さらに、平成 30 年に富山市は「SDGs 未来都市」に選定され、コンパクトなまちづくりをさらに発展させた多彩な事業が展開中とのことで、いくつかのモデル事業を紹介いただきました。いずれも、参加者の印象に残る創意に富んだ取り組みでした。

暫時休憩ののち、これまでご講演いただいた張先生、椿先生、本田政策監に、山極会長、富山県の地元企業・クラリアント触媒（株）取締役テクニカルセンター長の寺西雅幸さん、市民代表として前富山市自治振興会連絡協議会副会長の上口勇三さんを加えた 6 名のパネラーによるディスカッションを約 1 時間にわたって行いました。第一部で講師をお勤めいただいた堀田先生にモデレータをお願いいたしました。富山という地域の課題の解決に学術がどのように貢献できるか、学術に富山の行政・市民はどのような期待をもっているのかについて、多岐にわたる議論が展開されました。席上、上口さんからは、管理者不在となっている森林の保全についての問題提起がなされるなど、新たな課題も発見され、有意義な討論となりました。

今回の会議は、中部地区会議のとして初めての経験であり、当初は戸惑うことも多かったのですが、科学者懇談会富山県幹事のみなさん、富山県の会員・連携会員の方々、富山大学の先生方、富山大学の職員のみなさんの全面的なご協力を得て開催することができました。中部地区会議事務局の方々も、学術会議事務局

と富山大学との連絡調整において大きな役割を果たしてくださいました。おかげをもちまして、第二部の参加者数は 345 名を数えることができました。例年の中部地区会議主催の学術講演会と比較して、4~5 倍の人数であり「大盛況」と言える規模となりました。地方学術会議が拓く可能性について認識を新たにすることができました。あらためて、会議を支えていただいたみなさんに心から感謝いたします。